

【令和6年度足立区総合教育会議】会議概要

会 議 名	令和6年度足立区総合教育会議		
事 務 局	政策経営部政策経営課		
開 催 年 月 日	令和6年10月31日（木）		
開 催 時 間	午後1時12分 ～ 午後2時34分		
開 催 場 所	足立区役所南館8階 庁議室		
出 席 者	区長 近藤 弥生	教育長 中村 明慶	教育委員（教育長職務代理者） 早川 貴美子
	教育委員 倉橋 さとみ	教育委員 久保田 善彦	教育委員 土肥 和久
	政策経営部長 勝田 実	教育指導部長 岩松 朋子	教育政策課長 田巻 正義
	政策経営課長 鈴木 孝昌	学力定着指導員 半田 英雄	
欠 席 者			
会 議 次 第	別紙のとおり		
資 料	・ 次第 ・ 出席者名簿 ・ 座席表 ・ 説明資料「－学力向上対策の現状と課題－主に小学校」		
そ の 他			

(審議経過)

○鈴木政策経営課長

それでは、定刻前でございますが、皆様おそろいとなりましたので、ただいまより令和6年度足立区総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、政策経営課長の鈴木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、本会議は公開を原則としております。会議記録はホームページ上で公開させていただきます。

また、会議内容を正確に記録するため録音させていただきます。ご了承くださいますようをお願いいたします。

公開用として、会議中の様子を事務局職員が写真撮影させていただきます。その点もご了解いただければと思います。

続きまして、席上のマイクの使い方をご案内いたします。発言の際は、お手元のマイクのボタンを押し、ランプが点灯いたしましたら、最初にお名前をおっしゃっていただいてご発言をいただきますようお願いいたします。お名前は会議録作成に必要なためでございます。発言が終わりましたら、再度ボタンを押してくださいますようお願い申し上げます。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

まず、本日のご出席者のご紹介させていただきます。教育委員の皆様からご紹介させていただきます。

○近藤区長

お分かりだから、よろしいんじゃないですか。

○鈴木政策経営課長

分かりました。

それでは、本日ゲストとして出席いただきます半田先生をご紹介させていただきます。

前花保小学校校長、現在、学力定着指導員として学校現場を巡回し、支援を行っていただいております。

本日、区長及び教育委員会の求めに応じて関係する区職員も同席させていただきます。

区の職員の出席につきましては、出席者名簿でご確認いただきますようお願いいたします。

本日、総合教育会議は「児童・生徒の学力の現状課題と更なる向上策」がテーマでございます。

議事に入ります前に、近藤区長からご挨拶申し上げます。区長、よろしくお願いいたします。

○近藤区長

平成19年に着任以来、子どもの学力の定着向上ということは、区政の最優先課題の一つとして進めてまいりました。その時々教育委員の先生方のご指導ですとか、現場の先生方のお声も足しながら、様々な思いのつくりの手だてを講じてきたといっても過言ではないかと思います。

ご承知のとおり、一定程度の成果は表れておりますが、昨今、特に小学校は横ばいの傾向が続いております。右肩上がりにぐいぐいに行くような、そんな甘いものではないことは承知をしておりますけれども、今の踊り場的な状況を打開するためにどうしたことが必要なのか、また状況は刻々と変化しておりますし、タブレットの導入というような新しい状況の中で、今現場を回っていらっしゃる先生のほうから、ご提案だったり、または現在の現場の課題といったものも明らかにしていただきまして、今ちょうど新年度の予算の査定にも入っているところでございますので、必要な手だては予算も講じて、具体的にすぐにでも展開していきたいと考えております。

まずは半田先生のご意見を伺って、またそれぞれの教育委員の先生方にもご提案、ご発言頂ければと思っておりますので、今日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

半田先生も忌憚のないところで結構ですので、

厳しいご意見も含めて、ぜひよろしく願いいたします。ありがとうございました。

○鈴木政策経営課長

それでは、議事を進めさせていただきたいと思います。

次第の3番でございます。

学力定着指導員として各学校を回り、感じている課題、そして今後、さらなる学力向上を図るために必要なことについて、半田先生から、本日ご提言をいただきたいと思います。

ご出席の皆様の上には、半田先生からお話いただくパワーポイントの資料をお配りさせていただいております。

また、その資料には、本日お話しいただく内容の全体像が見えるような形でサマリーをつけさせていただいておりますので、こちらも併せてご確認をいただければと思います。

それでは、半田先生、よろしく願いいたします。

○半田学力定着指導員

ありがとうございます。よろしく願いいたします。

これまでの足立区での校長職14年間で現在の職の経験から、私の考えを率直に述べさせていただきます。

足立区ですが、足立区学力総合調査、平均点よりも通過率を重視しております。それは貧困の連鎖を断ち切るということで、ボトムアップをします。学力の底上げのためでございます。

次に、通過率の年度別変遷を見ていただきたいと思います。

上が令和6年度でございますが、2年生～6年生までの平均通過率、95以上の学校が1校、95未満90以上の学校が2校、そのような形になっているかと思います。

一番下の平成23年度をご覧ください。

平成23年度には75アップ80未満、そこが最高で7校ということだったのですが、現在では、区長がおっしゃられたように、このような形で通過率が上昇している学校が多いということでございます。

中学校も同様に、これは平成25年度からの変遷でございますが、このように向上しているのが見てとれるかと思います。

学力向上のために、足立区では次々と学力向上施策を考えていただき、学校と共に一緒になって実施してまいったところでございます。

このように学力調査が数値向上をしているのは、特に平成23年度～26年度まで教育委員会と学校長が一体となって、学力に対する危機意識が共通認識され、同じベクトル、マインドでパッションをもってやってきたということでございます。その施策との相乗効果。そしてそれ以降も、今に至るまで効果ある施策をそれぞれの担当者が責任をもって遂行してきたということが言えるかと思います。

ここからは現在の私が感じている課題でございます。

小学校の数値が、横ばいというよりも低下傾向のフェーズに入っているのではないかとこのことでございます。

小学校は国語が0.9、算数は1.4ポイント下がっているところでございますが、中学校は上がっているのが見てとれます。

グラフを見ていただくと、これは算数と国語の変化でございますが、算数も国語も令和3年度に比べて下がりつつあるということでございます。

中学校は数学は下がっているのですが、国語と英語が上がっている、いい傾向に見られるかと思います。

全国の学力調査、6年生と中3が実施しているのですが、令和3年度の国語でございますが、国も都の平均を超えていたのですが、現在の下のところを見ていただくと、国の数値よりも下回って

しまい、都との差がマイナス4.3と広がってきております。

次は算数でございます。これは通過率じゃなくて、国語も算数も正答率なのでございますが、国よりも全部の年度が上回っているものの、都との差が開き気味になっており、マイナス2、マイナス3.2、マイナス3.6になってしまっているという現状がございます。グラフでも見てのとおりでございます。

次の課題は、「学校間格差の拡大傾向」ということでございます。

まず、このグラフをご覧ください。

濃い青から上は通過率のいい学校ということになります。当然、平成26年度から比べて大変増えて、総体的には学力が上昇していると言えるのですが、下位のところを見ていただくと、本年度は4.5となっております、低位校が増えている状況です。

分かりやすくするために、校数で見ていただきたいと思います。

下の青色の帯、この5ブロックに集約されていたのが、現在は8のブロックになってしまっております。さらに、75未満70以上のところを見ますと、令和4年度は5校だったのが、令和6年度は8校に増えてしまっている。

それから上位のほうを見てみましても、令和5年度は31校ございましたが、本年度は20校に減ってしまっているという現状がございます。

そして、トップ校と下位校の数値を見ていただきたいと思います。

これはA校とB校というふうにさせていただきましたが、2年生～6年生までの今年の結果でございます。これだけの差があるのです。これを保護者が見たら、どのように感じられるかということでございます。5、6年生の状況を見て、この子たちが中学校に進学していくということになります。進学していく中学校にとっては、本当にこれはつらい数値ではないかと思ってお

りますし、その先、15歳の春がどのような形になっていくのか、非常に厳しいというふうな現状ではないかと私は感じています。

区立小学校から区立中学校への進学者なのですが、約500人が私学や都立に進学して、A層の10%が抜けている現状があり、それを中学校が3年間でなかなか取り戻せない。特に中1合宿に参加してくださっている中学校の校長先生は、その中1の状況、九九ができないとか、繰り上がり・繰り下がりができない子どもたちを見るにつけ、この状況を心配されている方もいます。これは通所型をやっている中学校でも同じ思いだというふうに私は思っております。

さて、この状況の要因として、分析させていただきました。

そのひとつに、小学校校長先生の思いの変化があるのではないかということなのでございます。すばらしい教育施策をつくっていただきました。これは平成23年度～26年度まで完成形になっているのですが、それが十数年たちまして、いろいろな厳しい状況、社会の変化があります。コロナ禍、不登校、保護者対応、いじめ、多様性、働き方改革、若手教員の増加、ICT等々、それぞれ重い課題が学校にのしかかっているというふうな状況でございます。

各校長先生の現状として、学力向上への取組、学力保障が仕事であると認識されて、ただ数値向上ではなくて、校内研究を充実され、授業力の向上を図っている学校もございます。

それから、かつてのプレッシャーを感じて、いまだにそのことを感じながら施策を粛々と遂行していて、数値向上をしてくださっている校長先生もいらっしゃいます。

私はこれが重要な課題だと思っているのですが、数値向上の結果を出しているけれども、負担感につながっている。そうした声も上がってきている。それから、いろいろな10年間の変化で、厳しい状況の学校があります。

私の肌感覚として、学定の仕事をしながら感じていることは、教科指導専門員、キュビナ、MIM、いろいろと有用な施策があるのですが、本当に学校によって活用に温度差がある。

そして次に、サマースクールです。サマースクールは小学校10日間、悉皆です。内容は校長に任されているとはいえ、対象児童を絞って、全学年が10日間実施と私は思っていたのですが、2、3年生は3日。4、5年生は3日。6年生は4日。1年生は0。こういった学校もありました。この3日間だけではとてもD層の子たちの学力向上につながるとは考えられません。

次に、小学校長会に関してです。

コロナ禍を経て他校の課題、全体の課題に対して関心が低下しているように感じます。また、新任の校長先生が、自らの課題等について先輩に相談することが少ないように思います。

次は、教育委員会についてです。

アナウンス、コミュニケーションが不足しているのではないかと思います。非常に厳しい時代があったので、非常に遠慮している。プレッシャーをかけたくない配慮。それから校長先生の自主性に任せたいというふうなご配慮だったかと思うのです。

校長先生方の今の教育委員会への気持ちを代弁すると、こういうことなのです。学力調査を始めて今年で20回目になります。平成23年度からもう十数年がたっております。学力調査の数値を上げることがゴールではないはず。10年以上、一生懸命取り組んできたということで、本当に貧困の連鎖は解消に向かっているのか。具体的な全体の成果を見せてほしい。

そこで、ここからは皆様方に提案でございますので、ぜひお考えいただければというふうに思っております。

一番大事なのは、教育委員会のリーダーシップ、ミッションステートメント、こういうふうに行っていくからという「見える教育委員会」にしてい

ただきたいというふうに思っています。

具体的な目標の設定。先ほどの通過率でございますが、通過率をどこまで伸ばせばいいのか見えておりません。共通理解、共通行動、そして成果を見せていくということでございます。

成果といえば、こういうふうに提示していただければ非常にありがたいと思っているのですが、例えば高校の中退率、私たちが頑張って中退率が下がっているとか、「これが減ってきましたよ、校長先生のおかげです」、それがいいですね。

次でございます。

これも区内のある高校と私立学校なのですが、23区平均しますと72.3%の大学進学率ですが、足立区では45.7%。もちろん足立区以外の高校に行っている、私学に行っているお子さん、そういったデータがあって、それを含めてこうなっていますというデータがあれば、さらにいいかと思っております。

それから足立区では、①、②、③の1つでも該当すると生活困難世帯と定義しております。

令和3年度4,001名の区立小学校に在籍する1年生の保護者が回答しております。今の4年生に当たりますが、ここにおいても16.7%、668世代の方が、まだこういうふうな生活困難世帯と定義されるところに入っている。これが増えているのか、減っているのか。かれこれ十数年やっていますので、親世代になって貧困が解消されていっているんだというふうなところ。あるいは「まだまだここが不十分だから、ここまで頑張っていきましょう」というふうな投げかけが、どうしても必要になってきているのではないかなというふうに思う次第でございます。

教員をどう動かすか。私は東京都での行政経験とこちらへ来ての行政、行政の方と教員は違うのですよね。働くモチベーションとか、働き方が。教員というのは教師の喜び、自分の気持ちが大きい。お金よりも時間よりも子ども。子どものためなら惜しみない献身や努力もする。たとえ学習に

関係ない福祉的な役割も介入することもある。

ですから校長や学校を動かすためには、より行政のほうで教員を理解し、情熱を持って思いを語っていただかないといけない。こんな表現では恐縮なのですが、愛で動くのが教員であるというふうに私は思っております。

ですから、まとめますと、校長との関係強化、主体性、やりがい、主体性を引き出す鍵は、任せる、責任を持たせる、適正な評価、褒める、認めるというようなことが大事になってくるのではないかと。校長自体は部下を褒めますが、自分が褒められることはない。ですから、やはり教育委員会に褒めてもらいたいという気持ちはあると思います。

教育3課、教育指導課、学力定着推進課、学校ICT推進課が主に支えているわけですが、その3課、さらに上層部の方が、それを理解して連携して動かしていただきたいと思います。

次の提案でございます。先ほどの校長の、マイナスの気持ちを何としても変えたいということなのでございますが、A・B層の小学校の学力向上策を校長裁量にしていくということでございます。

現在、全小学校67校は一律に同じ学力向上策と手だてを求めています。学校ですとA層の子、D層の子、それぞれその学力に合った手だてをしております。学力向上策を取っているのですが、A層の学校も、D層の学校も、先ほどのA校とB校がございましたが、同じように手だてを求めて、同じように書類を出し、同じようにやっていただいております。

学校間格差がある。ということは、上位校はもっと上を目指してほしいという気持ちもありますが、やはり公教育の同一サービス、同一成果ということを考えると、全校が通過率を80のラインを目指すべきだというふうに私は考えております。

通過率80を達成している学校もかなり多い

のですが、校長裁量にする。やるなということではなくて取捨選択するというところでございます。

課題になっている、負担感を減らすために即時コピー、即時自校採点、即時SP表分析、これを校長裁量。パワーアップタイムやサマースクールの実施日数や内容等を思い切って校長に委ねる。その代わり、その校長の裁量をもって責任をもって取り組んでいただくということでございます。

上位校に対しては、ウェートを次のステップへ、今求められている個別最適な学びと協働的な学びの実現のほうにウェートをかけていただきたいと思います。

80に達していない学校は、これまでと同様に学力向上対策を丁寧に具体的に継続していただく。さらに先ほどの授業改善も両輪としてやっていただきたいと思います。

80に達していない学校は現在16校ございますが、プレッシャーをかけるのではなくて、コンサルティング的に校長レクや学校状況ヒアを通して、適切かつ効果的に実施していくような支援をしていくということでございます。協働のマインドでということでございます。

そのための提案3としましては、学力調査への意識改革、過去からの脱却ということで、そこまでは求めていないんだということです。これからも学力調査は、どうしてもエビデンスとして必要であるから調査をします。順位ではないということです。自校のみに結果を通知したり、相対としては知らせないとか、そんなことが考えられるのですが、自分のことを考えると、私も校長時代は、この順位というものを非常に気にしておりましたし、順位を上げようと頑張っていたところもあるのですが、そこも変えていかなくてはいけないというふうに思っております。

提案4でございます。

いろいろと校長会からも提案がございますけれども、学力定着に関する総合調査、CBTを導入して欲しいという話も聞いております。実際、

学力定着推進課ではやっているのです。それに向けた業者とのすり合わせとか、要望とか出しているのですが、それが校長会になかなか伝わっていないので、今現状としてこういうことをやっている、そして数年後にはこうなっていくんじゃないのかなということを情報提供し、情報共有化していく。

さらに突き詰めると、次のようなことが考えられるのですが、毎年実は改善されておりまして、知識・技能から思考力・判断力・表現力、こちらは25%が総合調査の中に組み込まれています。ただの知識・技能だけではないのですね。そういった改善がされているのですが、それについても教育委員会として、学校現場として、どこのデータが欲しいのか、どのような力を測りたいのか。調査目的、内容を共通理解して意見交換していく必要があるのではないかというふうに思っております。

提案5でございます。

先ほどの学力調査で頭がいっぱい。本当に100%、私もそういった時期がございました。学力調査の数値を上げるための1年間だったのですが、そういった意識を変えるということなのですが、もし時期が4月下旬に遅らせることができれば、転入管理職や転入した教員に足立区の状況を説明して、そして理解の上に調査ができるというふうに考えます。

そして提案6でございます。

学校経営計画でございます。これは本当に他区とは全く違う形式でやっております。

学校経営計画の最初に出ているのが、この学力向上アクションプランでございまして、数値目標があって、それを上げる手だてを書かなくてはいけないのですが、80以上の学校は授業改善のほうにシフトしてもらう。80未満は今の現在の定着の手だてを丁寧に書いていただくというのが提案でございます。

提案7でございます。

指導主事でございます。現在、指導主事は、学力定着推進課、統括が1名、指導主事が3名おりますが、その結果の数値に目を向けられる余裕がございません。実を言うと授業改善のほうに今シフトしているのですけれども、現状は指導主事じゃなくてもできるだろうというふうな、例えば区民講座とか、大学連携とか、そちらのほうの仕事も兼ねてやっております。彼らは4名しかいないのですけれども、102校ある学校現場や子どもたちのために、学校経営支援、学力向上、授業力改善ということで、こちらにシフトしていただきたいというふうに思っております。指導主事が中心となってリーダーシップを取っていただき、私たち学力定着指導員、今、中学校3名、小学校4名おりますけれども、私どもがサポートしていく体制になればいいのではないかなと思っております。

提案8でございます。

教科指導専門員の先生方にはしっかりやっていただいているところなのですが、今、若手が非常に厳しい状況にあることから、教科指導だけでなく学習規律や生活規律、若手教員指導専門員へ、そして必要とされている学校へ、今、各校巡回指導でございます。1人の先生が4校、5校を兼ねて回っているのですが、80未満の学校に配置するというところでございます。

提案9。

次へのステップのウエートをぜひここに置いていかなきゃいけないということで、お話しさせていただきます。

授業改善でございます。強化1、足立スタンダード「虎の巻」、昨年度の大仙市派遣者に作っていただきました。小・中共に横展開がまた非常に弱い。足立スタンダードそのものにつまましては、まだまだ教え込みの授業が見られるということで、改善の必要性があるということでございます。

そして、私が強く言いたいのが、次の強化2でございます。

今、個別最適な学びと協働的な学びのほうに、要するにエビデンスでは測れない非認知スキルのほうに国として進んでいるところでございます。その中心となるのがICTの利活用でございます。

タブレットの活用、まだまだ不十分でございます。これによって「子ども主体」にしていく。キュビナのドリル学習の活用率を高めるということではないのです。これはあくまでも「思考ツール」として使っていかなくちゃいけない。ただ発表する、子どもの考えをパソコン上で出す、それを共有する。じゃなくて、お互いに個から集団、個から集団で思考を深めていくツールでなくてはならないところが、まだまだ弱いということでございます。

学芸大の堀田先生にGIGAスクール構想ということで講演会をしていただきました。以下のとおりでございます。

社会の今、国家的な課題でございます。社会がこのように変化しております。

一斉授業からの転換ということで、このような形で授業を変えていかなくちゃいけないということでございます。

足立区でもDX指定校がございしますが、大仙市で見えてまいりました。

やはり個別最適な学び、授業観を変えていかなくちゃいけないという時代に入っております。

「教員が教える授業」から「子どもが考える授業」に変換していかなくちゃいけない。この前の中学生の会議でございました。子どもたちが話し合う、子どもたちが学び合う授業が楽しいと、子どもたちも言っていたと思います。さらに私は、このDXによって、足立区の子どもたちがリアルに授業を受けられる子どもたちだけでなく、日本語の理解が不十分な外国籍の子どもたちもタブレットによって日本語の翻訳機能を通して恩恵を受けられるのではないかというふうに思っております。

今の足立区の現状は、国の指標に準じているというところでございます。私も実はそうなのでございます。まず指標を見て、こういうふうになっていくんだろうなというのは感じているのですが、足立区の今の状況、学力の課題も含めて、足立区型の言語化された短期・中期・長期の具体的な目標が見えてこないですね。ちょっと耳が痛い話かと思うのですが、これが明確にされない、何を狙っているのか現場は分からない。今ちょっとそこが混沌としてしまっている状況にあります。

国のビジョンは明確になってきましたので、足立区として、この現状を踏まえて、短期・中期の具体的な目標をぜひ考えていただきたいのです。

ですから、学力も同様なのですよね。80を目指すのか、もっと上を目指すのか。そういったところの明確なビジョンが今見えていないというのが正直な私の感想でございます。

しかしながら、これまでの積み重ねで、いろいろな子どもたちのできたという実感、喜びの声が届いております。感謝の気持ちを込めて動画を作らせていただきましたので、ぜひご覧いただきたいと思います。

(動画上映)

次に、昨年度の大仙市派遣教員が戻ってきて、一生懸命頑張って2年生がこんなふうになりました。

(動画上映)

子どもたちの喜びの声が届いております。

ぜひ提案をご討議いただきまして、校長会と連携してPDCAへのD○段階へステップアップしていただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

○鈴木政策経営課長

半田先生、ありがとうございました。

それでは、今、半田先生から様々頂いたご提案を受けて、教育委員の皆様からご意見等を伺いた

と思います。

まず早川委員いかがでしょうか。

○早川教育委員

そもそも論の質問で申し訳ないのですが、通過率の目標ということは、平均点より低く設定してあるのですか。

○半田学力定着指導員

2枚目のシートになりますけれども、目標値というのは、調査を全国でベネッセさんがやっているのですが、その結果から、このテストでは、この点数を取れていればいいだろうと。もちろん問題作成段階で目標値をある程度設定しているのですが、やった結果で、この程度取れていれば、この学年の学力をマスターしているというふうなものが、目標値、目標の点数ということになり、その達成した割合を通過率としています。

○早川教育委員

それは全国的に出るということですか。

○半田学力定着指導員

そういうことでございます。

○早川教育委員

学校ではなくて、全国的に出るという。

○半田学力定着指導員

ほかの地区と異なり、足立区は正答率より通過率を重視しています。

○早川教育委員

何しろ、この通過率というのがとても足立区では重視されているということは、いかに特上の子をつくるよりも、いわゆる中の子をいかにつくって、中以上の子をつくれれば、特上のほうには行くだろうし、というふうなことの流れかなという

ふうに。

○半田学力定着指導員

一番大事なのはD層なのですよ。D層の子を上げるためにということなので、上を上げるのは、逆に言うと簡単なことかもしれない。塾のこともあるかもしれないのですが、D層は通塾率も低いと思われるので、その子たちを学校の力で上げていく。それが足立区のプラスになっていくということです。

○早川教育委員

ということですよ。

○半田学力定着指導員

はい。

○早川教育委員

この間、子どもたちとの話合いで、私は足立スタンダードで中の子をなるべく増やす、いわゆる通過率を高くするということが、授業を見ていて、足立スタンダードでできるのかなと。どうしてかという、最後まで教科書は行き切れないんじゃないかというふうに思っていたのですが、子どもたちと話したら、スタンダードの授業の方が子どもたちは「とってもよく分かる」と言うのですよね。分からないところを、先生じゃなくて、できた友達に聞くほうが、先生より自分たちがよく分かる。みんな言っていたのです。最低でもペアワーキング、1人でやりたいとか、そういうことを本当に言っていたのです。

少なくとも私は現場に出ていないわけですから、昔の母親の目で見てしまうと、私たちの常識を変えて授業とかをやっていると先生も大変だろうし、それこそこういう補習なども、できる子が少し参加してもらいたいんじゃないかなと思いますし、かなり変えていかないとけないんだというふうに思っています。それはしみ

じみと分かりました。

○半田学力定着指導員

おっしゃるとおりでございます。

○早川教育委員

それをどういうふうに変えていったらいいのかというのを、どこまでドラスティックにやったらいいのかというのが、先生の提案とかも受け入れながら、どういうふうにしたらいいのかなというふうに思っています。

○半田学力定着指導員

ですからやはり管理職が変わらないといけません。大仙市の教育長もおっしゃっていましたけれども、「ノートを書かせても、教え込んでも入っていかないでしょう。だから遠回りかもしれないけれども、そういった形で子どもたちを信頼して、子どもたち同士の話を増やして」と、おっしゃっているのです。

足立区の小・中の校長先生が、そういうふうなところを、「これだけは覚えなさい」みたいな授業になってしまっていれば、そこから脱却しないといけないというふうに私も思います。

○早川教育委員

ありがとうございました。

○鈴木政策経営課長

ありがとうございます。

続いて、倉橋委員いかがでしょうか。

○倉橋教育委員

倉橋です。半田先生、ありがとうございました。

私も、本年度は大仙市、鋸南の中1夏季勉強合宿にも視察に行かせていただきました。

鋸南は、今ビデオを見たら、見ていた子たちがいたので、ちょっとうるうるしたくなるぐらい

「ああ、よかったな」と。最初は本当に、午後なんか眠いところを、先生が一生懸命隣で「ほらほら、この1問やったら」、「ほら、この1問やったら」と言いながら一生懸命先生が教えてくださって、子どもたちも一生懸命それに食らいついて、ちょっとでもちょっとでも、1問でも多くというふうにやっていたのを思い出すと、本当によかったなと思いました。その時間とその感動というのは子どもたちには絶対に必要だなというふうにも思いました。

そうやってちょっとでも、やはり子どもたちに分かったんだというような気持ちを持たせてあげるとするのは大事なんだなということと、あと大仙のほうでも、大仙市は小学校1年生からずっと同じような形で学習しているので、今の足立の中学生とかに「これをすぐに取り入れてやって」と言っても、子ども自体が発言をするということに慣れていないので、「じゃあ、ちょっと話し合ってみて」と言って、すぐにできることではないのですけれども、それでも今続けていかなければいけないこと。今できないから1年、2年で諦めて、「これ駄目だよ」じゃなくて、ずっと続けていけば必ず身になるものだと思うので、これはどうにか学習の仕方、足立スタンダードの中にうまく取り入れて続けていってほしいなと思いました。

学校訪問に行っていると私はつくづく思うのですけれども、やはり校長先生の熱意、これがなかったら学力は上がらないなというのは本当に思います。いろいろなことを1年、2年見て、3年目にして「ああ、こういうふうな校長先生だから学力は上がったんだ」「この先生だから、こうなんだ」というようなのは本当に見えるようになりました。

ただ、先ほど先生が言ったように、やはり校長先生も人ですから、褒められたら「ちょっと頑張ろう」というふうに思うと思います。なので、そういうふうなところは、やはり教育委員会がしっかりとサポートしてあげてほしいなというふう

に改めて感じたところです。

数値を上げるって本当にすごく難しいことだと思うのです。1年、2年でできることではないと思うので。なので、長い目で見ながらも、それでもどうにか校長先生の意欲を出せるような声かけを教育委員会のほうでできるといいなというふうに、また、その声かけを私もさせていただけたらいいなというふうに思います。ありがとうございました。

○半田学力定着指導員

ありがとうございました。

○鈴木政策経営課長

ありがとうございます。

続きまして、久保田委員、いかがでしょうか。

○久保田教育委員

久保田です。よろしくお願いします。半田先生ありがとうございました。

ご提案にほぼ賛成ですので、どうにか実行できればよいと思います。

まず提案1についてですが、足立区の経済状況と学力との関係です。貧困の連鎖を断ち切るということと関連して、全国の学力・学習状況調査では、自宅にある書籍の冊数から子どもたちの貧困状況とか、家庭の貧困状況を調査しています。「社会経済的背景」と言っております。それを昨年度と本年度を確認すると、足立区は社会経済的背景は都や国と比べても随分低いです。つまり、かなり困難な状況にあり、貧困な状況が見てとれます。

その一方で、先ほど見ていただいたように、平均点は国の平均とほぼ変わらないです。中学校は少し下がってしまっていますが、小学校はほぼ変わらない。ということは、それだけ施策も効果的に機能しているし、各学校の先生たちは努力していることがわかります。まだまだ不十分との話もありますが、全国と比べて十分に努力の成果が、表れ

ていると思います。そこは評価すべき点だと私は思っております。詳しい分析は事務局のほうでしっかりとやっていただき、校長先生等に「成果は上がっている。他の区や地域よりも随分頑張っている。」ということ伝えていただきたいと思います。それが1点目です。

それを踏まえて、学力向上対策はこれでおしまいではなく、しっかりとやるべきだなと考えます。施策が安定して実施するようになると、どうしても形骸化します。形骸化を防ぐために、学校ごとに施策をカスタマイズし、上位・下位に分けるとか、リソース（専門員）のことですが、リソースを一部に集中させるとか、そういう実態に応じた調整は非常に重要なことと思っております。

私は、上と下だけじゃなく、もっと細かく分けてもいいと思います。ただし、上でも下でも、それぞれの学校が工夫してもらわないといけないと思っております。上は自由にやれといいますが、単に自由でなく、自分の強みをどう生かせるかを考えて工夫していただきたいと思っています。

それは足立スタンダードにも言えると思います。「足立スタンダード」はかなり定着し、どの先生も認識しているようです。例えば「振り返りが大切だ」と書いてありますが、「何で振り返りしなきゃいけないの？」と言われると「言われているからやってるんだよ」という先生がいます。校長先生も、委員会も振り返りをしなさいと言っていますから。

振り返りは、何のために、どう効果があるのかを理解させないといけない。「個の学習と協働学習を交互でやりなさい」と書いてありますが、その意味は何でしょうか。その意味理解が下位の学校の先生には十分でない方がいるはずなので、意味理解も含めて向上してもらおう。上位の学校は足立スタンダードをどうカスタマイズしたら、自分たちの強みを生かせるのかについて検討するとよいと思っております。

もう1点いいでしょうか。

やはりクラスの状況は、非常に重要なのだと思います。主体的で協働的な学びになるように、先生は頑張るのですが、主体的・協働的が可能な学級状況と、可能じゃない学級状況があると考えます。学校全体でなく、クラスによっての話です。

学級の状況に合わせた活動が大切であろうと思います。「主体的で対話的で深い学びをさせましょう」と言っても、事前の準備が大切です。

QUはどの学校でも実施しているので、学校状態の分類分けができますよね。そういったデータを参考にしながら、優先順位を決めないといけないと思います。「やれ、やれ、頑張れ」だけでは解決しないと感想をもちました。

私からは以上です。

○半田学力定着指導員

ありがとうございました。

○鈴木政策経営課長

ありがとうございます。

続きまして、土肥委員、いかがでしょうか。

○土肥教育委員

半田先生、ありがとうございました。

一緒に校長をやってきた仲間として、まさに本当にこのとおりだなという思いをしながら聞かせてもらいました。

先ほどから、半田先生だけでなく、ほかの委員からも出ているように、究極は校長次第。私も、もうこれしかないと思っています。

私も後半の校長先生方全体を見ていて、非常に危惧していた点は、自分の言葉で教育施策を語れる校長が大分減ってきてしまったなという思いがあります。

つまり熱量の高い校長の割合が非常に年々少なくなっている気がしました。その理由は何でなのかと考えてみたときに、教員時代とか、副校長時代を足立区で過ごしていない校長先生の割

合がかなり増えてきているという現実があり、足立区の学力施策の背景とか、今の実態を理解していない校長先生が赴任してくると、他区でここまで徹底している区はなかなかないので、負担感だけが少しずつ少しずつ増えているなど。やらされ感。本当の意味を理解していなくて、やらされ感が増えているという実態があると思いました。

私自身も皿沼小学校に赴任したときに、全校朝会とか、集会で子どもたちが身近にいるときに話すようになって、3年生に「 7×8 」と言った瞬間に、「 7×8 」ができるか・できないかというのは瞬時で頭の中に「56」という数字が出てくる子ができるであって、小首をかしげながら3秒、5秒考えて「56」という答えを出してきている児童ができるかといったら、これはできると考えてはいけませんよね。3年生から当然掛け算九九を利用して、小数の割り算の計算とかが始まり、桁数も増えてきます。一つの掛け算九九で3秒、5秒違っている子が、ここから先、難しい計算ができるわけもなく、当然それは約分や通分にも及んでくるとなると、ここでできない、この現実があるのかというのは、私は行った4月で思い知らされました。

小・中連携もしっかりやれということで、加賀中の生徒とも仲よくなり、1年後、当然卒業をしていって、人懐っこいいい子たちだったので、「土肥先生」って手を振った女の子が忘れられないのですけれども、おなかが大きかったです。見た瞬間に何も言えなかった。とてもいい子が妊娠している現実。

P T Aの本部役員を頑張っていた中学校でも、頑張ってくれたお母さんに「何々君どうしている？」と聞いたら、残念そうに「先生、中退した」と。「今何やってんの？」「ガゾリンスタンドでバイト」、こういう現実を知ったときに、やらなきゃいけないという強い思いを私は持ちました。こういう背景を理解して、私は当然、皿沼小でも新田学園でも、教職員にはすごく話をしました。

そういうものの理解をしていない方が、サラリーマン的に言われたことを「役所に言われたから」「教育委員会に言われたから」「あなたたちやりなさい」「頑張りなさい」「通過率がこうだよ」と言っても、多分真剣にはならないということが少しずつ少しずつ蔓延してきた結果だと思っています。

でも、この十数年頑張った成果、貯蓄があるので、私は来年極端に成績が下がるとは全く思いません。ひょっとしたら元に戻る可能性はあると思います。でも10年先を考えたら間違いなく落ちている。これは今の状況だと間違いなく落ちるなど、私はそのように思っています。

先ほどから半田先生は厳しいだけじゃ駄目だというお話があったのですけれども、そのとおりだと思います。

しかし、この学力向上施策をやった最初の人たちの厳しさというものに対して、逆にここ最近、優しさというのですか、生ぬるさというのが両極にあると思うのですけれども、私は両方とも毒だと思っています。ほどよい厳しさも必要だと思うし、褒めるとか、配慮するということも必要だと思うのですけれども、なかなかそこがいいあんばいにいかず、今は逆に優しさのほうの毒が、ちょっと蔓延してきちゃっているなという気がとてもしています。

足立区のこれまでの背景を知らない指導主事が幾ら話しても、校長先生たちはなかなか真剣に心を動かさないと思います。逆に「何とかしなきゃいけない」と言って、半田先生はじめ会計年度職員の何人かの先生方、特に中学校で巡回している先生方が非常に頑張ってくれています。半田先生がこういうのを作ってくれた熱い思いを持っていても、どうしても会計年度職員という立場だと、指導主事に指導しようにも、校長に指導しようにも、なかなか半田先生の思いが、多分これを見せたとしても伝わっていかないんじゃないかなという気がしてならないのです。

じゃあ、どうすればいいんだよというところになるのですけれども、私がここ最近ずっと思っていたことなのですけれども、偉そうなことなのですが、足立区で要するに学力施策で汗をかいて必死になって頑張った半田先生をはじめ退職校長を、例えば教育長の右腕ということをある意味公言する。公言するというのは、例えば退職しているから正規職員でないにしても、そのAという人人を教育長の片腕で学力施策に特化した部長なんだとか、教育長に次ぐ教育次長なんだという肩書き、本当に情けない話なのですけれども、やはり人間って肩書きは大切だと私は思っているのです。

半田先生が、これを例えば熱く校長会で語ってくれば、響く校長は絶対いると思うのです。しかしそれをもっと増やすには、例えば半田先生だったら、会計年度職員の半田先生ではなくて、教育次長の半田先生とか、教育次長の何々先生という人が直接学校に行って「こうだろう」と言うと、やはり重みが違う。それが締めつけるとかそういうことじゃなくて、そういうことをしないと、現状をただで小学校の六十数校の校長が瞬時に心を入れ替えるかということ、年々一緒に汗をかけたメンバーが退職していつている。今年もまた退職していく現実を考えると、ここらで厳しいほうの毒も少し入れていくという必要性があるんじゃないかなと。

足立区の妊娠しちゃった子や中退しちゃった子の現実を自分で見るという経験は、全員の校長にしてもらおうというのは無理だと思うので、こういうパワーポイントとか、熱い思いを語れる人に語ってもらって、地道な活動をしていって、10年後に「落ちていなかったね」「若干上がったね」と。すぐには急激に上がるわけではないと思うのですけれども、ここまで頑張って上がってきたので、少しも落ちないというような意識でやるには、やはりもう一回、校長先生一人一人の、それこそ愛ではないのですけれども、心の中に火をつけてあげ

ないといけない時期に来たんじゃないかなと。

その対策の一つとして、肩書を持った経験者というのが、私は必要なんじゃないかなと思います。以上です。

○鈴木政策経営課長

ありがとうございます。

中村教育長、いかがでしょう。

○中村教育長

中村です。半田先生、いろいろご説明いただきましてありがとうございました。

ご提案頂いた中、やはり教育委員会として目標を明確に出していなかったという点が課題と感じました。併せて目標を語る以上、小学校67校なら67校全体の数値も大事ですし、下位層だったり、上位層もそれぞれに足らない部分を見ることで、教育委員会もこういった分析をきちんとやって学校に示していけないといけないという気がしました。なので、こういったところは早めにやはり着手していかなきゃいけないなと思います。

併せて、学校にもよるのですけれども、やはり教員の不足というのは現実問題として厳しい状況です。学力を上げるにしても、数年かけて適切な指導をすることで学力が上がっていくというだろうというのは状況を見ていて思いました。土肥委員からもありましたけれども、校長を指導する場合、なかなか会計年度の役職では厳しいというご意見もあるので、学校に対する指導が適切に行えるような体制づくりも、今すぐ思い当たらないのですけれども、そういう教育委員会としての学校を支援するための体制づくりをする。そして、学校それぞれへの厳しい目、励ましになるようなデータをしっかり提供して、それを納得してもらうということが少なくとも大事だなと思いました。

中学校の成績が上がってきているのは、小学校

がこれまで努力してきた結果として中学校の成績が維持できていると思います。足立スタンダードを小学校でしっかり定着していくと、中学校へという流れはスムーズだと思います。小学校が主体的な学びをやれば、中学校でも自然とそういう学習が中学校でも行えるかなと思うので、ICTの普及も含めて少し策を練っていかなきゃいけないと改めて感じました。ありがとうございます。

○鈴木政策経営課長

ありがとうございます。

半田先生、教育委員の皆様から様々なご意見が出ましたが、区長のほうからいかがでしょうか。

○近藤区長

今画面に映っている中で、「いつまでやるんだ」「どこまでやるんだ」と。「いつまで」と言っただけ、いつまでもですよ。「どこまで」と言っただけ、これは限界ないと思うのです。ということは毎年毎年、お子さんが替わるわけなので、いつまでに終わりということはないと思うのです。

ただ、「いつまでやるんだ」「どこまでやるんだ」という不平不満は、一生懸命やってくださっていて、成果を出していच्छる方だからこそ出てくる思いなんだろうと思います。表面的にやったふりをしている人には、こんな負担感というのはそうそうないと思います。ですから、そういう方々に対しての負担軽減というのが必要なのかどうかということは、これまた見極めていかなきゃいけないと思うのです。

上位校については、一定程度の裁量を校長先生に与えるべきだというお話でしたけれども、その一定程度のところまで盛り立てていたのが、今の校長先生かどうかちょっと分からない。校長先生次第だというお話がありましたけれども、逆に裁量を与えることによって伸びる校長先生もいれば、申し訳ないですけども、なかなか……。じゃ

あとということで、やらない先生もいらっしゃるんじゃないかなというふうに思うと、学力の相違、学校の成績でそれを振り分けることというのは本当に可能なんだろうかというのは、素人ながらに疑問を感じるわけなのですね。

ですから、負担感というのはどこから出てくるのか、やっている方々に対して、あまり褒めたり、いわゆるレジリエンスが上がるような、こちらから「よくやってくれている。先生のおかげで、この学校はここまで伸びている。生徒も非常に意欲を持ってやっています」というようなところの個別なコメントが足りないのかどうかかなということは思いますので、それはそれでまた考えていきたいと思います。

今日はもう時間来ているわけですがけれども、先ほどおっしゃった教育委員会の管理職と校長先生方の信頼関係が揺らいでいるんじゃないかみたいなコメントがありました。何が一番そういうところに行ってしまう要因になっているのでしょうか。

職員の配置もありますので、幾らそこで成果を出して行って学校現場とうまくやっていっても、未来永劫そこにいられるわけでもないということもあるわけなのですけれども、その中でどういうことが一番問題で、なかなか信頼関係が築けないのか。逆を言えば、どういうふうに持っていけば、お互いに信頼を持って両輪でいけるのかということなのだと思いますけれども、それについてはいかがお考えですか。

○半田学力定着指導員

教育委員会としてはまず、学校を支援する、校長を守る、支援するということが一番大事ではないかと思います。また、人事異動で人の入れ替わりがありますが、足立区のことを尊重する、そうした方が必要だと思いますし、そうした方の話す内容が有用だったと感じてもらえるかが重要だと思います。

○近藤区長

私も事故報告を受けますと、お子さんの答案がなくなって——結局出てきましたけれども、きちんと整理もできていない。子どもの答案が一時的にしる紛失するなんていうことは、一体その学校はどういうガバナンスになっているのだろうかというふうには思ったりしますと、やはりそれが1校だけでなく続いたりすると、臨時の校長会もやむを得ないんじゃないかなというふうに思ったりはするのですけれども。それも先ほどおっしゃった、校長先生方が「最近の人たちは教えてもなかなか難しい」とか「聞いてもこない」ということで、難しい時代になったなというのは実感ですけれども、それはそれとして、その中でやっていかなきゃいけないわけですからね。

○半田学力定着指導員

もちろん指導せざるを得ないとは思いますが、その中でのお話の内容ですかね。やはり指導内容によって校長のモチベーションも上がったりと下がったりしますので。

○近藤区長

いろいろやっているから負担感がある。うちの職員にもよく言われます。例えば「30分ルール大変だ」とか。だけど、これはやはり「組織を守るためには、負担でもやってもらわなきゃならないことありますよ」という話をしています。

ただ、本当に負担が負担で終わってしまうような内容だったならば、スクラップはそれこそビルドしていかなきゃならないのですけれども、長い間積み重なってきているものの中で、これはあまり効果が上がっていないから、これは取ってもいいんじゃないかとか、そういうふうな見直しの時期に来ているのかもしれないのですけれども、ラインナップとしてはどういうふうなお感じですか。

○半田学力定着指導員

ラインナップとしては非常に効果的だと思います。一番負担感が多いのは、テスト直後の自校採点のためのコピーで、学力定着推進課としても、それを業者に委託するとか、方法とかいろいろ考えたのですが、なかなかそれが実際には可能ではないと。

○近藤区長

お金の問題じゃなくて。

○半田学力定着指導員

はい。ですので、それならば必要のない学校。詳しいデータは、いずれにしろ2か月後には出ます。1か月後には素データは出てくるということを聞いておりますので、そこで提供すればいいのではないかなと思います。

ただし、下位校については、やはり一人一人の子どもたちを担任が採点していかななくてはいけないだろう。新しい担任が、より早く子どもたちの状況を知るとするのは正しいことだと思うのです。

○近藤区長

私も夏休みの通所型の勉強合宿を見せていただきましたけれども、正直言って、ただ単に学力の問題ではなく、申し訳ないですけども、何かそれ以前の、特別支援の観点から見ていく必要のあるお子さんもいるのかなと。そういうお子さんと、ただ学力の定着に問題があるお子さんをきちんと分けなきゃいけない。なかなかそこがうまくいかないですね。

○半田学力定着指導員

そうです。どうしても繰り返しやってもなかなか定着しないお子さんもいます。それは校長が一番その状況は分かっていると思うので、それに対応して個々に見ていかなくちゃいけないという

ふうに思っております。

ただ、中1合宿に来ているお子さんは、そうではないお子さんたちが来ていて、やればここまでできるんだということですよね。通所型の勉強合宿でも効果があると私は思っています。ですから、やるべき生徒にはきちんとやるということです。

○近藤区長

下位校については定着してしまって、全く入れ替わりがないという状況が、ずっと続いているということですか。

○半田学力定着指導員

そうですね。先ほど言いましたように校長先生次第で上下もします。校長が着任して翌年の調査で上がる学校もあれば、下がる学校もあります。

○近藤区長

上だから大丈夫ということではないということですね、その中には。乱高下がね。

○半田学力定着指導員

そうなんです。足立区の場合、本当にちょっと油断すると、どの小学校もがくっと下がるし、頑張れば上がるという状況にはあるんですね。下地ができていますので。

○近藤区長

厳しい環境の方が多い地域だからといって、これは下位に甘んじてでも致し方ないというようなことではなく、やり方次第で、少なくとも真ん中とか、少しでも上げていかれるということは現実にあるわけですね。

○半田学力定着指導員

どの学校にも、いい可能性があります。土肥先生のときの皿沼小学校も非常に頑張れましたし、花保小も同様です。

○近藤区長

そのとおりです。よく分かります。

○半田学力定着指導員

なので、それは校長先生の気持ちで、すぐにはできないですけども、年々積み重ねていくことで、これをやっていこうという教員との共通認識ですかね。

○近藤区長

ただ、そのときに校長先生の表彰制度ってあるわけじゃないですよ。やってもやらなくても、学力が上がろうが下がろうが、お給料も変わらないわけですよ。

○半田学力定着指導員

校長がおびえているのは、校長の勘違いなのですが、順位で評価が決まっているんじゃないのかなというふうには思っております。

○近藤区長

評価って東京都に出す評価か何かですか。

○半田学力定着指導員

そういうことです。お給料が決まっていく。人事考課制度ですね。校長のほうもありますので。

○近藤区長

悪いのはともかくとして、頑張っていたいた方には——と思いますけれども、そういうわけにはいかないのですか。

○半田学力定着指導員

いや、いいと思います。

○近藤区長

ということは、先ほど「負担感が強かった、頑張っているのに」というふうにおっしゃっていた

だいた校長先生は、その辺のところの実感がないのですかね。もう上がるところまで上がったちゃって、それ以上は上がらないという。

○半田学力定着指導員

十数年間同じことを本当にすごい熱量で、一生懸命やって、さすがにもう……という方も。

○近藤区長

疲れたなど。

○半田学力定着指導員

はい。区長も辞令交付式のときに「ずっと17年間同じことを言っている」とおっしゃったじゃないですか。そのとおりなのです。だから17年間も本当に一生懸命働いてきて、そろそろ疲れが出てきていると。

○近藤区長

分かります。実感としてはちょっと理解できませんけれども、頑張っていたかかないと。そういう一線で頑張ってきて成果も出された方が、先ほど土肥先生がおっしゃったけれども、一線を退かれるというこのタイミングになって、Z世代という人たちだけで蔓延しちゃったら一体どういうことになるのかと。

○半田学力定着指導員

要するに、施策を語れるメンバーがほしい。そして結束して、要望があれば統一したものを出していくべきです。

○近藤区長

最近はないですよ。

○半田学力定着指導員

以前は提案を持って行ったじゃないですか。「学校ではこのように努力し成果をあげるから、

このようにしてほしい」とか「夏休み延ばしてください」とか「土曜日の休みを増やしてください」とか、そういったところがちょっと……

○近藤区長

最近「親から夏休みを短くしてください」という要望が圧倒的に多いですね。

○半田学力定着指導員

そうですか。

○中村教育長

食事を作るのが大変ですからね。

○近藤区長

大変だから。

○近藤区長

まとめとして、どうでしょうか。
岩松部長のほうから。

○岩松教育指導部長

半田先生、ありがとうございました。

目的、背景、ここが明確に伝えることができていないというのが全部の根底にあるのかなというふうに私も反省をいたしました。

今後、教育長とも。

○近藤区長

あと成果ですね。

○岩松教育指導部長

そうですね。成果もしっかりと伝えていけるように、それが一番なのかなというふうに今日感じました。ありがとうございました。

○近藤区長

例えば校長会で、「この校長が行った途端に何

ポイント下がった学校がありますよ」とか、「逆に何ポイント上がった学校がありますよ」ということまで言われるとプレッシャーだというわけでしょう。

○半田学力定着指導員

そういうことになります。個別に。あと総体的にこういうふうになっているからということ。

要するにステートメントを出す、そういった結果を言うことが、大切なことなんだということなんです。

○近藤区長

何か最後にございますか。

○鈴木政策経営課長

よろしいですか。ありがとうございます。

それでは、以上もちまして、令和6年度総合教育会議を閉会いたします。皆様ありがとうございました。